永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談⑰

38歳で父は出征 戦死 かの大戦で 皆逝った

郡家町　藤枝　美枝子さん

昭和16年の7月、父（森本登・徳島県三好郡箸蔵村州津）は赤紙といわれた召集令状により出征しました。当時の父の年齢は38歳で、私は小学校4年生でした。わが家族の祖父、母、私、妹二人と弟の6人を置いて征きました。当時周囲にはまだ若い男性がたくさんいましたのに、なぜ高齢の父が、と悲しくなり、子どもながらにお国を恨んだことを覚えています。かつては男子が二十歳になると徴兵検査があり、父は甲種合格であったからだと知りましたが、私はすぐに納得がいかず寂しく悲しい思いで過ごしていました。

それと出発の時は、お国のために征くのだから、めでたいこととして、日の丸の小旗を振り振り小学生にまで見送らせたのを覚えています。ところが、父の場合は世情不穏な折、スパイが横行しているとのことで、目立つことはできなかったらしいのです。それで、隣の人がひとりそっと来てくれての出征でした。小旗の見送りもなく、今でも思い出すと、寂しく哀れなさまでした。

父はまず善通寺市の師団へ入隊しました。そして、日曜日には、兵隊が外出を許されるので、面会が叶うかも知れないと知り、何としても会いたいと私たち母子は行ったのでしたが、叶いませんでした。父に喜んでもらおうと持参した好物も手渡せず、生け垣の中へ投げ入れるようにして、顔も十分に見られず、声もかけられずに別れたのです。そして、これが最後の別れとなりました。

そのうちに「十二月八日」開戦となりました。その間の父の異動について、私は知るよしもありません。後に、遠く外地の満州（現在の中国東北部）へ移動させられていることをハガキで知りました。無事を告げるだけのハガキでしたが、私はすぐにいろいろと書き返信しました。果たして厳しい検閲の下、父に届いたかどうかは分かりません。

父の居る満州は大変に寒いところと知りました。私たちは、年老いた祖父や、身体の弱い母や妹と畑を耕しては、食べる物を調達するのが日課でした。

しばらく音信の途絶えた時期が続きましたが、遠く離れた南方の比島（フィリピン）からの便りが届きました。その時私は子どもながらに思ったのです。「第一線で敵と戦って、勝ち進んだ後へ行ったのだろうか」などと。

比島の父とはたびたび交信したことを思い出します。その中で一通のハガキに「桜咲く故郷に帰りし夢を見つ」とあります。古里を出て、苦しい中、懐かしい故郷を思い出していたのでしょうか。その一通のハガキこそは、父が戦地で活躍していた証しとして、今も私が大切に保存しております。

そんなこともあるうちに、「帰国できる日が近いかもしれない。土産まで用意しているからこの便りの返事は出さないように……」と知らせがありました。その時の私たちの喜びは大きく、ひたすら待ち望んでいただけに、夢ではないかと思われました。その後どれほど経った事か……。しかし、それはまったくの夢に終わりました。

戦況は逆転し、敵は新しく戦力を増強し、勝利にゆるんでいるわが軍に対して、猛攻撃を浴びせたのだと思います。私が思うに、戦況が悪くなっているのに内地でのラジオなどは、勝利しているとうそを報じていたのです。そして戦う武器を全く失っているのに、勝てるはずもないのに、国民をだまし続けたあげくに若い尊い命までも奪っていたのです。

「八月十五日」天皇陛下の「玉音放送」を聞き、ついに終戦を迎えるに至ったのです。

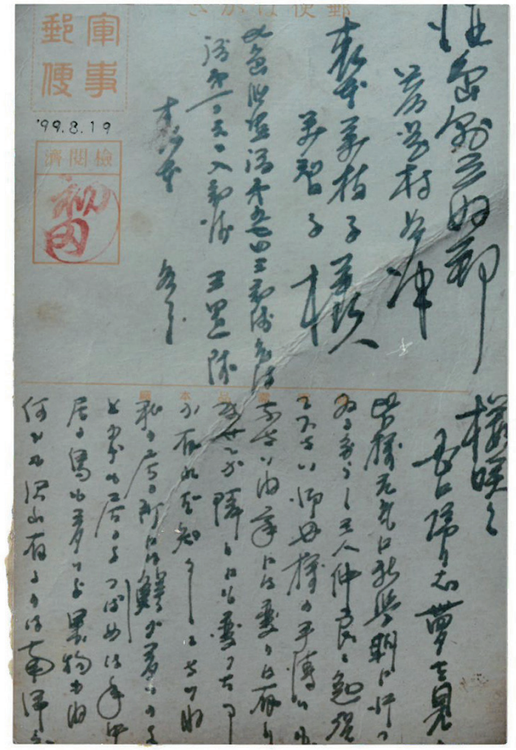
その後生きて敗戦を迎えた人たちの復員が始まりました。祖父は毎日ラジオにしがみついてそれのみを聞いていました。

「比島復員完了」の放送で、その時はじめて、私の父は帰らぬと知らされた思いです。戦死の公報には、昭和二十年七月十六日戦死とありました。41歳でした。

以上が父のことですが、父の姉と弟についてもお話ししたいと思います。

伯母は、長男、次男ともに戦死。続いて叔父は神戸市から現地出征し戦死です。次の叔父は支那（中国）から現地出征し戦死です。次の叔父は海軍兵のため軍艦（名前は思い出せません）とともに、沈没。

このように私の身内は、残らず戦争の犠牲となったのですが、今では、この事実を語れるものは私ひとりとなりました。



父から届いた一通のハガキ

丸亀市の市外局番 0877